

### 33. 高分子塗布洗浄法の実用性について

お茶の水女子大 松川 哲哉  
渡辺 許子  
大野マツエ  
市原三枝子

1. 高分子塗布洗浄法（仮称）ともいうべき全く新しい観点に立つ洗浄方法を松川が提案し、昨年度の本学会総会にその趣旨を発表した。（工化，**62**，1584，1892（1959），**63**，1030，1441（1960）他）しかしこれらに用いた被洗布は，主として日本油化学協会暫定案による人工汚染綿布（同協会編，油脂化学便覧，p. 654（丸善）1958）を用いたものであり，本洗浄法を実際の汚れに応用するにはなお数多くの段階の洗浄試験を要するものと考え，それらのうちの主要な点について検討を加えた。

2. 被洗布に高分子水溶液を塗布・浸漬・撒布等によって吸収させ，乾燥後に水または洗剤水溶液を用いて洗浄を施すものであり，通常の洗浄方法よりも遙かに高い洗浄効率を得られ，また始めから高分子と界面活性剤との混合液を被洗布に適用し，乾燥後にこれを水だけで洗浄することもさらに効果を増し得る。試験布による洗浄試験は油化学案に準じ，被洗布はいろいろに変えたが，人工汚れ成分もなるべく同案に従った。実地の汚れを用いる場合にも同案に沿い布表面反射率の差から洗浄率を判定した。

3. 疎水性繊維（例：テトロン）には高分子溶液だけの塗布による水洗浄は効果がないが，界面活性剤との混合塗布では効果が上がる。汚れは固型粒子だけのほうが洗浄効果が著しく，固型油脂が増すと効果がない。CMCやSAを用いる場合，やはり乾燥過程が必要であるが加熱乾燥でもよい。その他。